

『互いに愛し合いなさい』

聖書 ヨハネによる福音書 15章 11～17節 讃美歌 14 481 393 543 90 24

説教 森田幸男牧師

神様の導きによって金谷優美子姉が私たちの群れのひと肢にされたことを喜び、感謝いたします。今、入会式において主の御前に誓約をされましたけれども、その第三項目はこうでありました。「あなたはこの教会に加わって聖徒の交わりをなし、教会員に相応しく生活することを誓約しますか。」そして私たち各自も、洗礼を受けた時に、「主の日の礼拝を重んじ、教会員にふさわしく生活することを誓約します」と誓約いたしました。今日は、先ほど朗読されましたヨハネによる福音書を通して、「教会員に相応しく生活するというのとはどういうことなのか」「キリスト者として生きるとはどういうことなのか」を御一緒に学びたいと思います。

ところで今日はヨハネによる福音書 15章 11節以下 17節までが読まれました。そして今、入会式におきましてその前段の 1節から 5節を朗読いたしました。で 15章の 1節から 17節は一連のものであります。「イエスはまことのぶどうの木」という小見出しが付いております。

この 15章を含みますヨハネによる福音書の 13章から 17章は、「キリストの告別説教」と呼ばれていることは、ご存じの方が多いと思います。この 17章の後、18章にいきますと、キリストは逮捕されるわけでありまして、そういうわけで、この 13章から 17章は告別説教でありまして、今日の箇所はその一部であります。勿論、聖書のすべての言葉は、正にどの言葉も「告別説教」であると、こう言ってよいと思います。

英語では、旧約聖書を OLD TESTAMENT、新約聖書を NEW TESTAMENT、と言いますけれども、この「テストメント」という言葉は、これは「遺言」のことです。勿論それだけが唯一の意味ではありません。「約束」とか「誓約」とか「証言」とか、そういう種々の意味がある言葉ですけれども、第一の意味は「遺言」であります。

私たちは特にこの「告別説教」と言われているところだけを他の箇所以上に重んじるということではありませんけれども、逆に言いますと、聖書のどの部分もそれは遺言の意味を持つ言葉だということでありまして、その言葉は、遺言は、その関係者においてはその人を絶対的に拘束する言葉であります。最後決定的な言葉であります。

私たちは、この近年と言ったらいいでしょうか、わたし自身、今も共に日本キリスト教会信仰の告白を共に唱和いたしましたように、聖書を生ける神の言葉と信じております。そして、それは遺言であり、誓いの言葉でありますから、それは必ず実現いたします。

旧約聖書で、「言葉」というのは「ダーバール」というヘブライ語であるということも何度も申し上げました。この「ダーバール」は「言葉」という意味ですけれども、これも、「約束」「行い」「事件」「出来事」「実現」等々、少し大きい辞典を開きますと、ダーバールだけでも何十個もいろんな意味で聖書の中で訳されていることが分かります。

「言葉」というこの「ダーバール」が、同時に「事件」であり、「出来事」であり、「実現」なのだ、一つの言葉でそういう意味を持たせるということは、言葉は単なる言葉でなくて、それは本当に実現する、出来事になる言葉なのだということでもあります。ですから、この聖書の内容は本当に確かであり、それは全て真実であります。

同時に、私たちがもし「聖書」を森に例えるならば、その森を形作るところの一木一草があるわけですが、全体としての確かさと共に、それを形成する一木一草、一言一句、それぞれが実に豊かで美しい内容を秘めていることを私たちは味わってきております。今日わたしはこのヨハネによる福音書 15 章 11 節以下を読んでおりまして、そのイエス様のお言葉の一つ一つが本当に味わい深く、実に滋味豊かであって、これは味わい尽くすなどということはとても出来るものではない。そういう風に感じております。

私たちは、イエス様がお語りになった時、その言葉に込められた意味と思いと度合いと、私たちがそれを聞く時の受止め方の度合いとでは、非常に違いがある。非常な差がある。そのようにわたしは今回強く感じたのであります。

イエス様が公の伝道に出られる前、荒野で誘惑を受けられたことが、マタイによる福音書に詳しく出ております。4 章の 1 節から 11 節ですが、そこにはこうあります。

「さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、“霊”に導かれて荒野に行かれた。そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。『神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。』イエスはお答えになった。『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と書いてある。』」

このようにイエス様は答えられて、その誘惑を退けられたのであります。

人はパンだけでは生きないのです。お金だけでも生きることが出来ないのです。神の口から出る一つ一つの言葉で、初めて人は生きることが出来るのであります。その神の言葉がこの聖書であります。

さて、今日は 15 章の 11 節以下なんですけれども、その前段 1 節から 10 節、そのうちの 5 節までは先ほどの入会式で朗読したのでありますけれども、この 1 節から 10 節を読んでみますと、「わたしにつながっている」という表現、「つながっていなさい」或いは「わたしの愛にとどまっていなさい」という表現が、各節ではありませんけれども、十回ほど出てまいりますので、一節に一回、『わたしにつながっていなさい』『わたしの愛のうちにとどまっていなさい』という言葉が出てくることとなります。

ここに、「つながっていなさい」というのと、10 節の「わたしの愛にとどまっている」というのは、ギリシャ語では同じです。ここはぶどうの木の譬えで、『わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である』という譬えが語られておりますから、「つながっていなさい」と訳されるのです。そしてぶどうの木は、旧約聖書においては「神の民イスラエル」のたとえとして出てきます。そしてまた同時に、旧約聖書においては、本当に良い実を結ぶべきぶどうの木が、いつも良い実を結ばないというふうなことで出て来るのであります。

そのようにたとえの中では、「わたしにつながっていなさい」と訳されるわけですがけれども、その文脈をはずして直訳しますと、「わたしの中にとどまっていなさい。」「わたしの愛の内にとどまっていなさい」ということであります。

これがイエス様のおっしゃることでありまして、9 節から読みますと、『父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい。わたしが父の掟を守り、その愛にとどまっているように、あなたがたも、わたしの掟を守るなら、わたしの愛にとどまっていることになる。』このようにおっしゃっておられて、ここはたとえではありません。

教会に相應しい生活、キリスト者の信仰生活、それはひと言で言うならば、「イエス・キリストの内にとどまっていること」「イエス・キリストの愛の内にとどまっていること」。言い換えれば、「キリストとの交わりの中に常にいること」、それがキリスト者の生活の基本であります。

それで今日の箇所に移りたいと思いますが、今回わたしはここを読んでおりました、先ほども申しましたけれども、「ああ、これはとても読み尽くすことも、味わい尽くすことも出来ない」と、感じたのですけれども、最初この箇所を説教のテキストに選んだとき、心にとまった御言葉は 16 節でした。

『あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。』

このイエス様の言葉が心にとまって、そしてここを読もうと思った次第であります。その時わたしが感じたことは、わたしは、キリスト者たるものは、イエス・キリストに「友」として選ばれた者なのだ。その光栄ということを強く覚えました。同時に、“ああ、この友、主イエスの期待に応えなければならないのだ”と思いました。そして“この友の言葉は真実で確かである。だからこの友・キリストによって選ばれたというこの事実は、決して揺り動くものではないのだ。”そういうことをわたしは強く感じたのですけれども、はたして、友なるキリストのその期待に応えているだろうか。そういう反省を強く迫られたのであります。

「キリスト友会」(きりすとゆうかい)というプロテスタントの一派があるのはご存じかと思えます。十七世紀にイギリスでジョージ・フォックスによって始められたものであります。日本にも、「イエスの友会」と読むのでしょうか、賀川豊彦等が 1921 年に結成した

ものであります。キリスト教主義の「婦人の友の会」というのもあって、この教会にもその会のメンバーが多いのですけれども。この「キリスト友会」が結成された時、ジョージ・フォックスは、出合ったキリスト者に対して失望落胆したということが動機にあったということのようです。そしてどこに本当のキリスト者のあり方があるのか、ジョージ・フォックスの場合は、それを求めに求めて、「キリスト友会」を興すことになります。「フレンド派」とか「クエーカー教徒」と呼ばれているのと同じ団体ですね。生けるキリストの語りかけを聞いて、それに従って生きる。そこにこの派の特徴があります。

今日の箇所、12 節以下にこのようにあります。『わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これが私の掟である。友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。私の命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。もはや、わたしはあなたがたを僕（しもべ）とは呼ばない。僕は主人が何をしているか知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼ぶ。父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからである。』

ここでイエス様は、『わたしはあなたがたを僕とは呼ばない』と言っておられます。「僕」の原語は「奴隷」ですけれども、旧約聖書においても新約聖書においても、この「僕」「奴隷」というのは制度としては歓迎すべきものではありませんが、聖書においては、「僕」「奴隷」というのは、それを自分自身に当てはめて使う当人が、これをむしろ光栄と感じて使っていますね。「キリスト・イエスの僕」というふうにパウロは自分のことを言いました。旧約聖書でも、モーセをはじめ預言者たちも、皆、彼らは「主の僕」という自覚をもって生きたわけです。それは主なる神のご意思がわたしにおいて実現し、実現されていくのだ。そういう「神に従う者」という自覚、そういう者とされたという光栄の思いをこめて、「主の僕」と言いますから、これは決して蔑称とか蔑むべき表現ではありません。けれども、制度的には、奴隷制度においては主人と奴隷がいて、その奴隷は主人の言われるとおりに動きます。この前読んだあの百人隊長の僕、あのパイスの場合は主人の心を本当によく知って仕えていたと思いますけれども、いつもそうはいかないで、命じられたらわけが分かって分からなくてもその通りに動くというのが奴隷であります。

「わたしはそのような意味においてあなたがたを僕とは呼ばない。わたしはあなたがたを友と呼ぶ」とキリストは弟子たちに言われます。「主の僕」であることを、以上ない光栄とした預言者たちであり、パウロもそうであります。けれども、『わたしはあなたがたを友と呼ぶ。』それはここでは、何故なら、「父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせた。奴隷ならば知らないでも動くけれども、わたしは友なるあなたがたに父から聞いたことを皆、知らせた。わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟だ。神の御心だ。そして、友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」と。

わたしはこの13節が、読んで字の如くなんですけれども、これがこれまでずっと腑に落ちなかったのです。何か格言的で、13節だけが文脈から離れてあったのですが、今回、文脈のなかで読んでみると意味が変わってきたのです。これは、イエス様が友と呼んだ弟子たちのために、更には私たち一人一人に対しても友と呼んでくださり、その友のために、あなたのためにわたしは命を捨てると、そういうふうと言っておられるのだし、そして実際そのようになさったのであります。そしてイエス様は、『そのようにあなたがたも生きなさい。死になさい。』こういうふうと言っておられるわけでありまして。

わたしは「友」という言葉を聞くと、50年来の、中学以来の親友、二人のことを思います。長いこと会わなくても、会ったらその何十年の空白が埋まるような友達ですけれども、会えば友達ですから呼び捨てですよね。森田、福井、桑野というふうに。神学校から帰って来て牧師になってから会った時に、福井くんとか、桑野くんとか君付けで読んだら、「お前、冷たい」と言われて、それからまた呼び捨てに戻りましたけれども。そして呼び捨てで、「お前」なんです。「森田、お前は・・・」という調子で話します。今でもそうなんです。

友達というのは何か？ 主人と奴隷だったら、これは上下関係があります。しかし、友達は同格なんです。どんな社会的地位をえようが、友達は友達なんです。昔を知られていますから、偉そうなことは言えません。というのは、友というのは同格で、上も下もないのです。

ということは、イエス様は私たちを同格の者とみなされている、ということです。ここで私たちは、私たちの信仰生活のレベルアップということを実際に考えないといけないと思います。キリストのレベルにまで成熟するということが、本当にキリストとの交際の中におり続けるということ、そしてその愛の内に留まって、その愛に生きようと、キリストは私たちに求めておられて、これはもう遺言的、決定的言葉ですから、キリストは決して後には引かれない。不退転の思いで語っておられるのです。

キリスト者のあり方ということで、思いだすことがあります。わたしが親しくしていた一人のキリスト者がいました。そしてまたいろんな運動で親しくしていたキリスト者がいました。双方は同業でした。ある時、後者の知人に前者の知人を知っていますかと聞きましたら、「ええ、知っていますけれども、あの人クリスチャンだったのですか？」と言ってびっくりされたんですね。知っておられたのですけれども、それは否定的な意味で、あの人がクリスチャンなんですかという意味の反応をされて、もうわたしはその後、ものが言えなくなってしまうことがありました。

準備で読んでおりました注解書の中に、「キリスト教を本当に人々に伝えるのはキリスト者その人である。キリスト者の生活なのだ。この『奴隷』から『友』への昇格（というののもちょっと変ですけれども）は、それは今まで神によって与えられている祝福と、桁違い

の祝福に我々があずかっているということ、を表すのだ」というふうな注解がありました。

キリストと同格なんですね。私たちはイエス・キリストを「救い主」「贖い主」と、そう信じておりますし、その通りなのですが、もっと「キリストの友」という自覚を持って私たちは日々の歩みをしないといけないのではないのでしょうか。今日の11節に、『これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるためである』とあります。キリストと友達付き合いと言ったらちょっと碎け過ぎでしょうけれども、友・キリストとの交わりの中に、同格と見做された者として日々歩む。そしてその心得は、友のために命を捨てることです。そのように心得て生きる時、イエス・キリストの喜びが私たちの喜びとなる。そのようにキリストは言っておられます。

信仰生活には犠牲が伴います。しかしいかなる犠牲にも勝る喜びがあるのです。キリスト者の生活の雰囲気というのは、喜びですね。他のどこにもない祝福が友・キリストとの共生の中にあるのです。常に、終生、キリストと共にあるということの光栄を忘れず、私たちは友なるキリストの期待に応えていかなければいけない。そして私たちのキリストとの交わりの生活が、“こんな生活もあるのか。”“ こういう喜びもあるのか。”“ こういう祝福もあるのか ” という証になる。それが伝道ですね。

私たちは今年の主題聖句はマタイによる福音書5章16節でした。

「あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」

これは「立派な行い」でもいいのですけれども、これは「魅力的な行い」と訳した方がいい言葉です。「あなたがたの立派な、魅力的な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」

そういう意味で、私たちの教会でも、「あの人にあやかりたい」といった表現がわりによく使われるようになりましたけれども、「あの人なああいう祝福にあやかりたい」というか、「あずかりたい」というふうに、我々にする人々が思うような、感じるような、そういう魅力的な生活を生きたいと思います。そのためには、キリストの友として、キリストにあやかる以外にありませんね。

祈ります。

愛に富みたもう主イエス・キリストの父なる神様。

あなたは私たちのためには、御独り子の命をも惜しまずささげてくださいました。その御愛の内に、私たちが昨日も今日も明日も、常に、とこしえにあることを覚えて感謝いたします。

あなたの御心に相応しい者へと私たちを造り変えてください。

この祈り、主イエス・キリストの御名を通し御前にお捧げいたします。アーメン